



# 贗作幽靈指揮者

---

---

tontokaimo39

---

賈作幽靈指揮者

「たいへん！たいへんよ！」

「どうしたの、美恵？」

「ゲンゴロがたいへんなのよ」

「えっ、ゲンゴロ何かしたの？」

「ちがうよ、小百合先生がね、お見合いするんだって」

「わっ！それたいへん！」

「ゲンゴロ、目をまわすわ」

「切腹するかも」

「でも美恵、どうして知ってるの？」

「お母さんに聞いたの、お母さんと親しくしてる近所のおばさんが勧めたんだって」

「それでいつ？」

「今度の日曜、あ、違った、その次の日曜」

「ふうん、ねえみんな、どうする？」

「そのお見合いは呪われてるって手紙書こうか」

「そうだ、あなたは一生不幸になりますってね」

「ねえ、お見合いしてるところへ行って、みんなでフラダンス踊るのどう？」

「がんばれ小百合先生！と書いたプラカード持って」

「おもしろい、相手の男の人びつくりして逃げ出すわ」

「でもだめよ、だってどっちも小百合先生に迷惑かけるもの」

「そうか：ねえ夕子、さっきから黙ってるけど何かいい考えないの？」

「そうだ、夕子だったら何かあるでしょ」

「うん、二人、くつつけちやったらいいよ」

「えっ、くつつけるってセメサインで？」

「木工用ボンドでもいいよ」

「小百合先生、今日は！」

「あら美恵ちゃんと陽子ちゃん、何？」

「私たちね、今度の日曜日、ひょうたん池公園までサイクリングするの」

「サイクリング！いいわね、楽しそう！私たちってだれだれ行くの？」

「夕子と嘉美、真子と多佳子でしょう、それに堅と良太も」

「ふうん、五年二組の仲良しグループね」

「ねえ先生、先生も一緒に行きましようよ」

「あら、そのお誘いだっただの、どうしよう…」

「行こうよ先生！」

「よし、じゃあ仲間に入れてね」

「やった！」

「フフ、私たちは成功！夕子どうかな？」

「夕子のことだから、変な手使ってるんじゃない」

「先生！」

「夕子か、何だ？」

「あのね先生、今度の日曜日サイクリングするの」

「サイクリングか、どこへ？」

「ひょうたん池公園よ」

「いいな、家族でサイクリングか」

「違うよ、陽子や美恵や、それに堅と良太」

「うん：ちよつと待て、ひょうたん池だと、おい、子どもだけでは遠過ぎないか？」

「お母さんも同じこと言ったよ、でも、だいじょうぶ、

源吾先生が行ってくれるからと言ったら『それなら安

心ね』って」

「何？おい…」

「先生、どうせデートの予定などないでしょ、いっしょに行つてね」

「こら！」

「あっそうだ、お母さんね『だったらお弁当、先生の分も作る』って、コンビニで買わなくつていいよ」

「おい、そういうことは、勝手に…」

「五年二組のすてきで可愛い私たちよ、先生だったら見捨てないもん」

「あのなあ夕子…」

「決まり！これでみんなの家も安心して行くことを許してくれるね、じゃあ約束！」

「お、おい、ちよつと待て！」

「あら源吾先生、おはようございます」

「あっ小百合先生、おはようございます、あれ先生自転車でどこへ？」

「ひょうたん池公園、先生のクラスの仲良しグループにさそわれたの」

「えっ、じゃあ先生一緒に！」

「あら、先生も！」

「しかしおかしいな、子どもたち誰もいない、確かみんなでここに集まる約束だったはずだが……」

「先生ほらあそこ、何か紙が貼ってあるわ」

「うん？ 『私たち誰が最初に到着するか競争することになりました、だから先に出発します』だと、あいつら！ まあ危ない道ではないからいいが……先生、仕方がない私たちも」



「ねえ先生」

「はい」

「先生とこうして二人だけで走るなんて、思ってもみなかった」

「あら私も」

「先生、一年生って可愛いでしょ」

「可愛いわ、でも今日のような計画は高学年でないと、高学年のいいところね」

「ええ、まあ、おかげで日曜まで引っ張り出されて：夕子のやつ：」

「あら夕子ちゃんに頼まれたの？あ、本当は先生のクラスの子の計画ね、私ご迷惑だったかしら：」

「い、いやとんでもない！」

「そう、よかった！」

「うん？おかしいな、子どもたちここにもいない」

「池のあちら側かしら」

「ともかく一休みしませんか？」

「そうですね」

「あつちよつと待ってください、このベンチ拭きますから」

「今度はポケットからゴキブリなんて出さないでくださいよ」

「あつ、あれは…あの…」

「フッフ、夕子ちゃんから聞きました、夕子ちゃんって本当に面白い」

「あの時夕子はずっと私の前にいたのです、それなのにいつの間にか…夕子、マジックができるのかな…」

「夕子ちゃんも可愛いけど、五年二組ってみんな本当

に面白いですわ」

「面白いのはいいのですが、何かいたずらと言えは五年二組、いたずら軍団ですよ」

「今日のメンバー、その中の仲良しグループですね」

「いや、いたずら軍団の中枢部です、夕子が軍師で総司令官、ああ先生のご専門の音楽で言えば、夕子は作曲者でかつ指揮者、それも恐怖のコンダクターです、夕子がタクトを振ると中枢部だけでなくクラス全員で一斉にいたずら交響曲を奏でるのだからたまらない」

「面白いですわ、でも先生はあの子たちが大好きなんですしょう」

「ええそれはもう」

「あの子たちも先生が大好きなのだと思います、私もその仲間に入りたい……」

「えっ！そ、それは…」

「先生、こんなお話してもいいでしょうか？」

「何ですか？な、何でも」

「私、次の日曜日にお見合いをします」

「え、ええっ！」

「どうしても断わることができなかつたの、でも相手の方がどう言われようと交際はお断りするつもりです」

「そ、そうですか…」

「最初からその気のないお見合いって、相手の方に失礼で悪いことですよわね」

「そ、それはまあ…いや、いいことです、いいに決まっています」

「あら?!」

「でも一人だけ、この方だったら断らないわという方がいるんですけど」

「えっ！そうなのですか…そんな人が…」

「その方の名前は、げ・ん・ご・先生」

「ええっ！」

「だめですか？」

「いや！私のお見合い相手が小百合先生だったら、私も絶対に断らない！」

「ねえ、いい雰囲気よ」

「やっぱり夕子の木工用ボンドよくくつつくね」

「良太、おまえも美恵とあんな風に」

「嫌だよ、良太と二人でベンチなんて」

「ほら振られた」

「でも良太の家の椅子だったらいいよ」

「えっ！」

「良太の家食堂だから、美味しいもの出してくれるよね、でも食べてしまったらすぐさよならするから」

「それはないよ、そうだ堅だつて夕子が好きなくせに」

「うん好きだ、でも夕子少し怖いからなあ…」

「こら、何変なこと話してるの、もうそろそろ出るころよ」

「そつと後ろからよ、いい、一、二、三」

「せんせい！」

「ワッ！」

「キャッ！」

「やった！小百合先生が源吾先生に抱きついた！」

「こ、こら！おまえたち…うん？また夕子の…あれ、

夕子は？」

「夕子ね、『身の危険を感じるからしばらく幽霊になつてゐる』だって」

「何が身の危険だ、陽子、これは夕子のたくらみだろ  
う？」

「知らないよ、夕子、『セメダインと木工用ボンド、どつちがよくくつつくかな』なんて変なこと言つてたけど」

「夕子のやつ……」

「あれ先生、二人とも顔が真っ赤だ」

「こらあ！」

「キヤハハ、大成功！」

「ねえ、何か聞こえない？音楽よ」

どこからともなく威勢のいい音楽が流れて来た。

「ああこれ、向こう側に野外ステージがあるのよ、合唱や楽器の愛好グループがよく練習してるわ、ここなら近所の迷惑にならないでしょう」

「ねえ行ってみようよ」

なるほど、ステージの上で七、八人の女性が演奏している。

「お母さんたちのグループね」

演奏しているのは中年の女性たちだが、その前でタクトを振っているのは小学生のようだ。

「あれっ、夕子だ！」

「あ、あの子のお仲間ですね、私はこのグループの指導をしているのですが、『おじさん、指揮さして』と言うからやっごらんと言ったら、これじゃこつちが顔負けですよ」



「夕子ちゃんうまいわ」

「ほんとだ、すごいな夕子！」

曲が終わると、夕子はぴよこんとお辞儀をしてステージから飛び降りる、指導者の男性からも、演奏をしていた女性たちからも、そして小百合先生やみんなからも一斉に拍手が沸きあがる。

「夕子ちゃん、じょうずね」

「おもちやのマーチなんて、私向きじゃないわ、運命か何かじゃないと」

「あら、夕子ちゃんたら」

「まったくよく言うよ、おい夕子」

「あつ、それ以上近づかないで、可憐な美少女に」

「何が可憐な美少女だ、こら夕子、どうして指揮なんかしてたんだ？」

「先生が『夕子は指揮者だ』と言ったでしょ」

「それだ夕子、先生たち二人の話を聞いていたな」

「うん、全部聞いたよ、私は先生たちのすぐそばに隠れてたもん」

「おい夕子…」

「先生、おめでとう！」

「ああ、ありがとう、でもな夕子…」

「先生だいじょうぶ、他の先生には内緒にしてあげる、代わりに通信簿はオール5、あっこれはよしてと」

「うん？」

「先生、小百合先生との結婚式、私たちを招待してくれない？」

「うん、それは名案だ、よし約束しよう！」

「そうしたらね、みんなでフラダンス踊ってあげる」

「……」

「あつ源吾先生、夕子と二人で内緒話、小百合先生がやきもち焼いてるよ」

「もう陽子ちゃん！」

「ハハハ、じゃあ私たちはこれで、さようなら可愛い指揮者さん！」

楽器のグループは帰っていった。

「良太、私のお弁当半分食べていいよ」

「やるな良太、やっぱり美恵と良太は熱々なんだ」

「違うよ、プロの作ったお弁当食べてみたいだけ、だから私も半分もらうよ」

「はい先生、これ先生の分」

「うん夕子のお母さんの手作りか、おいしそうだな」

「小百合先生のだと、もつといいのでしよう」

「こら陽子！」

「源吾先生もごいっしよなの知ってたら、私作ってくるのだったわ」

「あつ、夕子のお母さんに言っておくね、『源吾先生、小百合先生のお弁当の方がよかった』と言ってたよつて」

「もう喜美ちゃん！」

「ワツ！先生たちまた酸性だ」

「この先生をからかうと後が怖いよ、通信簿オール1だなんて」

と、その時だった、「キヤアー」と言う悲鳴が池の方から聞こえた、見ると小さな子どもが水に浮いているのだ、

「ぼ、坊や！」

お母さんらしい人が叫びながら、池の柵を必死で乗り越えようとしている、

「いかん！」

叫んだ源吾先生が、走りながらズボンを脱ぎ捨て、柵を越えて水に飛び込む、みんなも一斉に柵に集まる。

「先生がんばれ！」

「がんばれ！先生！」

「先生、もう少しよ！がんばって！」

源吾先生は子どもを抱き上げると、そのままお母さんらしい人の方に泳いで行く、

「やった！先生！」

「バンザイ！バンザイ先生！」

お母さんが子どもを抱きかかえると、すぐ小百合先生

が駆け寄った、

「だいじょうぶですか！すぐ救急車を…あら坊や笑つてる！」

「ありがとうございます！だいじょうぶです、夫がよくプールへつれて行って遊ばせていたので…」

「本当！水を飲んでる様子もないし、仰向けだったのがよかったのね、でも風邪をひくわ、源吾先生もずぶ濡れ！」

「本当にありがとうございます！あつ先生ですか、私の車の中に大きなタオルがあります、ごいっしよして拭いてください、坊やも着替えさせますから」

「そうですか、じゃあ」

三人が駐車場に去った時、みんなの後ろから突然声がかかった、

「何かあったのですか？」

見ると四十歳前後とそれより少し若い男性の二人連れだ、

「私たちは警察の者です、ちよつと芝生で一休みでも思つてここへ寄つたのですが、にぎやかな声が聞こえたものですから」

「子どもが池に落ちたのです、いやこの子たちではありません、もっと小さな子、あつ、私はこの子たちの学校の教師ですが」

「何！それは大変だ！」

「でも心配ありません、ゲンゴロ：い、いや男性の同僚がすぐ助けたので子どもは無事です」

「そうですか、それはよかったです」

「この池はひょうたん池と言つて、名前は可愛いが深

くて危険なんだ、魚を釣りに来た子どもが何度か事故を起こしている、今は柵で囲って常駐の監視員もいるはずだが」

年配の方が若い方に説明する、若いと言っても三十前後だろう。

「ねえお巡りさん、今はみんなお昼の用意してるか、お昼ご飯食べてるころよね」

と、夕子が口を開いた。

「そうだな、オフィス街の近くなら大勢がベンチで弁当を食べたり芝生に転がったりとにぎやかな時刻だが、ここは一日で今が一番静かな時だろう」

「そんな時間にあのお母さん、小さな坊やを連れて何してたのかしら？」

「うん？」



「あの坊や、誤って落ちたのならもつと岸边にいるはずなのね、でも岸からはずっと離れてた、だからゲンゴロ先生泳いだのよ」

「な、何？」

「おい！と言うことは！」

「誰かに投げ込まれたのか！」

「じゃあその子のお母さんに……」

「違うと思うよ」

「うん？どうして？」

「お母さん、坊やを助けようと一生懸命だったし、お母さんが坊やをなんて……もし何かわけがあったとしても、それなら私たちから見えない場所を選ぶはず」

「そうか、しかし母親がわが子を、と言うことはなくとも心中と言うことが……」

「だったら抱っこしていつしよに水に入るわ」

「ううん、君はすごい場面を想像するんだな、だが君たちと二人の先生以外には、お母さんしかいないじゃないか」

「あら、そこに二人いるじゃない」

「おいおい、私たちは大きな声を聞いて…」

「キヤハハ！お巡りさん冗談を本気にしてる」

「こら、大人をからかうな…」

「でも本当にもう一人いるよ、ほらあそこ！」

夕子が指差した木の陰から、一人の男が飛び出した、男は一瞬逃げようとしたが、源吾先生たちがやって来るのと挟み撃ちのようになって、諦めたように立ち止まった、

「誰だ、お前は！」

「あつ、貴方ですか！坊やを池に落としたのは！」

「お母さんですね、警察の者です、この男をご存知なのですか」

「知らない人です、でもこの人に呼び出されたのです、亡くなった主人のことで大事な話があると」

「ほう」

「でも主人のことではなく、私と付き合って欲しいと、もちろん断りました」

「そうか、おまえストーカーか」

「い、いや、何度か見て素敵な人だと…」

「それで断られたために坊やを！」

「ち、違います、俺じゃありません！」

「じゃあなぜ隠れていた？」

「諦められなくて外の道をうろろしていたのです、

すると大きな声が聞こえたので何だろうと思つて……」

「お母さん、坊やが落とされるところは見えてないので  
すか？」

「はい、手洗いに行きたくなってこの子をそのベン  
チに座らせておいたのです、終わつてふと池を見ると  
坊やが……」

「あの、何かあつたのですか？」

また一人男が現れた。

「ああ貴方はここの監視員ですね」

「あら横山さん」

「お母さん、この人を？」

「ええ、ご近所の方です、横山さん区役所にお勤めと  
おっしゃっていましたが、ここだったのですか？」

「区役所ですが、一月交代でここの監視員を努めるの

です、そうですか坊やが池に…無事でよかった」

「さてストーカー君、署に同行してもらおう、名前は？」

「ち、違います俺じゃありませんよ！」

「まあそれは署でゆっくり聞こう」

「お巡りさん待って、ねえ監視員のおじさん、制服の上から二番目のボタンどうしたの」

「何？あれ！前から糸が緩んでいたんだ、どこかに落とされたな」

「お母さん、坊や左手に何かをずっと握ってるんだけど何かしら」

「この子着替えをする時からよ、ねえ何持ってるの、お母さんに見せて？あらボタン！」

「監視員さんの服のボタンと同じね、どうして坊やが

持つてるの」

「な、何！それじゃあ」

「抱き上げられた時に坊やは無意識にボタンを握ったのね、糸が緩んでたボタンは投げられる時にちぎれてそのまま坊やの手に残ったのじゃない」

「横山さん、それじゃあ貴方が！貴方は私に結婚を迫っていた、私は坊やがいるからと断っていた、それで貴方は！」

「おい！坊やがいなければと思ったのか！」

突然監視員の男は逃げ出した、若い方の警官がすぐ動いたが、堅の方が速かった、堅は後ろから男の足にタックル、うつ伏せに倒れた男の背中に、太った良太がドンと飛び乗った。

「やった！堅と良太すごい！」

女性軍から一斉に拍手が起こる。

パトカーが到着した。

「この男を署まで連行しろ、それからストーカー君一応貴方の話も聞こう乗ってくれるな」  
年配の方が指示する。

「お母さんと坊やは私たちの車に乗りませんか、やはり署で事情を聞きたいので」

「私は自分の車がありますから」

「そうですか、それじゃあ先導しますから少し待ってください、先生ゲンゴロとおっしゃるのですな、人命救助で表彰ですよ、ゲンゴロとはどんな字を？」

子どもたちがキヤツキヤと笑い出し、夕子は舌を出して、百合子先生が少し赤くなっている。

「よしてください、表彰なんて嫌ですよ！」

「どうしてもです、あ、君たち三人も犯人逮捕の協力者だ当然表彰を」

「僕らも嫌だよ、お父さんに危ないことをするんじゃないと叱られるのに決まってる、なあ良太」

「うんそうだよ」

「あのねお巡りさん」

夕子が年配の警官の耳にこっそりと何かを話しかける、

「そうか、無理にと言うわけにはいかないからな、じやあ」

「なあ君」

と、今度は夕子に、若い方が話しかけた、

「坊やを池に投げたのは、ストーカーじゃなくて監視員だとどうしてわかったんだ？」



「あら簡単、ストーカーのおじさんを見ても坊やは笑  
ってたのよ、でも監視員のおじさんが現れた時、一瞬  
お母さんにしがみ付いたの」

「そうか、ボタンのことは？」

「坊や、ずっと手を握ってたから、何持ってたろう  
と気になってただけ」

「うーん、しかし君はすごいな！」

「ねえお巡りさん、さっきのパトカーのお巡りさんの  
ような制服、どうして着てないの」

「ああ、俺たちは刑事だから」

「刑事って偉いの」

「まあな」

「ふうん、人って見かけによらないのね」

「……」

「おーい、何してるんだ行くぞ！」

「あ、じゃあ君、さようなら！」

「さよなら刑事さん！」

「ああ驚いた、なんて頭のいい子だ」

「うん、おまえの頭があれぐらい働いたらなあ」

「で、浜本さん、彼女何を言ったのです？表彰状のことで」

「ああ、ゲンゴロ先生が表彰は嫌だと言うのは、ほらもう一人いた女の先生と仲良くしているのが、他の先生たちに知られたくないからだとき、それから『本当に犯人逮捕に協力したのは坊やだよ』と言うんだな、一本取られたがその通りだ、おい、おまえも何か話してたじゃないか？」

「制服を着てないのは刑事だからだと言うと『刑事つて偉いの、人は見かけによらないのね』ですよ、ハハハ、これ浜本さんのことでしょう」

「バカ言え、おまえのことじゃないか」

その時、車内に突然歌が流れだした、

「さよならは別れの言葉じゃなくて、再び会うまでの遠い約束……」映画「セーラー服と機関銃」の主題歌だ、

「こら宇野、何だこれは？」

「無線とラジオのスイッチを間違えたのです…あつしまった！あの子の名前を聞いていない…」

了

おわりに

かなり、いやまったく強引なこじつけです。  
次は確か「幽霊温泉」だったと思いますが

さよならはわかれのことばじゃなくて、ふたたびあうまでの・・・  
ということで今回は「さようなら！」

ここに登場する人名は全て架空のもので、万一同名の方がいても、なんら関係ありません。

## 贗作幽霊指揮者

<http://p.booklog.jp/book/87622>

著者 : tontokaimo39

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87622>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87622>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ